
狼は眼鏡の中に。

文樹妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼は眼鏡の中に。

【Nコード】

N1351E

【作者名】

文樹妃

【あらすじ】

眼鏡で隠された、彼の瞳は冷たく、無機質で 生徒と、教師と
いう壁を、あたしは一生乗り越えられないと思っていた。それなのに、今、あたしは信じられない行動をしている。「キスしてください
い」「あたしの誘惑、先生はどうするんだろう。

銀縁の、シンプルなフレームが、彼の輪郭に収まると、冷たい印象を与える。

どうしてなんだろう。まるで、その眼鏡の中で伏せられた、切れ長の瞳は、薄いレンズという膜で、守られているようにさえ見えた。「富永、次、二十三ページから」

必要最小限の言葉で指示されて、あたしは飛び上がるような気持ちを抑えて、なんとか冷静を装って立ち上がる。

そして始まるのは、授業という退屈で、変化のない、毎日の光景。それでも、あたしにとっては、唯一の、貴重な時間。彼を堂々と見つめられる、甘くて、苦い時間だった。

卒業を間近に、まだ授業以外で話をしたこともないけれど、こうして見つめている間だけは、彼があたしのものだど、夢見ることができる。

あたしと、彼を阻む壁は、果てしなく高く。きっと、この先越えられることはないだろうと、そう思っていた。

それで、満足していると、思っていたのだ。でも、自分が思っているよりも、あたしがもっと欲張りで、罪深い生き物だということを、知る時が来るのだった。

奇跡 そんな単語が頭に浮かんだ。同時に湧き上がってくるのは、奇妙な恐れ。

「で、俺に何をしてほしいわけ？」

目の前で、眼鏡越しに見つめられて、そんな台詞を吐かれている。だなんて。信じられなかった。

それよりも信じられないのは、さっき自分が言った、ドラマ顔負けの台詞。

『バレたら、大変ですよ』

まさかあたしがそんな脅しめいたことをするなんて。思いもしなかったというのに、心とは裏腹に、滑り出た、言葉。

『北原先生と、そんな関係だなんて、知らなかったなあ』

そう続けたあたしを、明らかに睨んできたのは、いつも教壇という邪魔な空間越しにしか、近づけなかった、遠い人物。

恋しくて、夢にまで見るほど、恋しくて　その想いを告げる勇氣すらなかったあたしが、今、何をしようというのか。

自分にもわからないあたしの本音を、覗き込もうとでもするかのように、彼が見つめてくる。

「そんな関係って、どんな関係だろうなあ。別に、何も噂になるようなことは、してないつもりだけど」

意地悪な瞳でそう呟く彼は、授業中の冷たい彼とは別人のようだった。『教師』という仮面を脱いだら、彼はこんな顔をしていたのだろうか。

「でっ、でも　昼休みの準備室で、ネクタイゆるめて、首元に…その、そんなものがつくような関係って、堂々と人に言える関係ですか？」

とても口に出しては言えなくて、あたしは彼の首元にはつきりとした、赤い痣を遠慮がちに指差した。

「きつ、北原先生だって、あたしに見られて、あわてて立ち去って　十分に怪しいですよ！」

提出し忘れた授業のプリントを渡す、というあたしの名目は見事に崩れ去って、代わりにやっているのは、こんな情けない、脅迫。顔が赤くなっているのが、自分でもわかる。全然、脅しにもなっていない。

それでも後に引けなくて、あたしは必死で彼を睨みつけた。

「ふうん。そんなことはどんな風にも、言い訳ができることだけだね　まあ、いいや。大人しいと思ってた君が、そこまで言うんだ。

聞いてみてもいいよ。それで、俺にどうしてほしいの？」

最初の質問に戻って、彼はさらりと訊ねた。昼休みはあと少しもうすぐ、授業に戻らなければいけない。

そんな理性は、息が感じられるほど近くで、見つめられたことで消えてしまった。

「キスしてください」

自分の言葉に、自分で驚いた。取り返しのつかないことを、口に行っている。そうわかっているのに、目の前で見開かれた、彼の瞳があまりに綺麗で　　惹きつけられたまま、目を逸らすこともできなかった。

心臓が爆発しそうに脈打っている。きっと、あたしは真つ赤な顔をしている。震えそうになる足を、あたしは必死で床につなぎとめた。

驚きが通り過ぎたあとの、彼の瞳は、またいつもの表情を取り戻していた。いや、いつもの冷静さとは違う、挑発的ともいえるような、余裕にあふれた瞳。

「いいよ」

皮肉げにすら見える、甘い微笑みでそう返されて、あたしは目眩に襲われた。

今、何で、何て言ったの　　？　　混乱と、戸惑いと、緊張と、色々な思いがあたしの全身を駆け巡る。

そんなに簡単に、了承しちゃっていいの？　　自分のとんでもない申し出はすっかり棚に上げて、あたしはパニックに陥っていた。

だって、まさか、そんな答えが返ってくるなんて、思いもしなかったから　　。

声も出せないでいるあたしをよそに、彼はさっさと立ち上がり、準備室の唯一の窓に備え付けられたカーテンを引いている。

「あ、あの……」

埃っぽい空気が動いて、あたしは呪縛から醒めたように、ようやく声を出した。

「一応、人目があるからね。君だって、噂にでもなったら困るだろう?。」

何でもないことのように、そう言って、教材などが並べられた机を通り過ぎ、彼はあたしの目の前に立った。

「どういうキスがお望みな? リクエストによっては、お応えできるか分からないけどね。」

冗談めかしたように、あたしを見るその瞳は どうしようもなく魅力的で、あたしなんかの手に負える相手じゃないことは、すぐにわかる。

いや、ずっと前からわかってたのかもしれない。だからこそ、無機質なその眼鏡で隠された、彼のこんな表情が、ずっとあたしは見たかったのだ。

矛盾した自分の気持ちをなんとか隠して、あたしは覚悟を決めた。そう、これはあたしの最初で最後のチャンス 絶対に、逃してたまるものか。

「あなたが、いつも恋人にしているように いいえ、今までしたことがないような、そんなキスを。」

瞳を閉じて、あたしは言い切った。彼の余裕を、少しでも崩せればいい。一瞬だけでいいから、本気の彼を、見せてほしかった。

再び開いた瞳に映るのは、彼の見たことがない、顔。大人の男の、ときどきするような、瞳。

「 わかった。後悔、するなよ?。」

カチャリ、と彼が外した眼鏡が、そばの机に置かれた音が聞こえた。

初めて見る、レンズ越しじゃない、彼の瞳。不思議なほどに優しく、少し熱いようにも見えた。

頷いたあたしの頬に触れた、彼の手 大きくて、温かな手の平にそっと導かれる。

昼間だというのに、少し薄暗い準備室。その空間が、二人だけの密室に変わった。

キスというものさえ、したことがないあたしにとって、未知の経験 それは少し怖くて、それ以上に甘い、逆らえない誘惑だった。唇が触れ合った途端、息苦しいほどに、彼があたしを抱きしめた。「ん……っ」

今までの余裕が嘘のように、激しくて、熱い、彼のキス。唇から、全てを奪い取ろうとでもするかのように、舌を絡ませ、何度も角度と深さを変えて、あたしを侵略する。合間に聞こえる、彼の吐息は、まるでこの瞬間を待っていたかのような、熱を帯びたもので。目眩と、痺れのような、甘い感覚が、あたしをすっかり骨抜きにした。

永遠のように続くかと思われた、秘密の行為は、夢つつつのうちに、終わった。

そして、囁かれた言葉に、あたしはその一瞬が、夢でないことを知るのだ。

「まったく 卒業まで、なんとか耐えようとしてたのに」
人の気遣いを、無駄にしゃがって、と。確かに彼はそう呟いた。
お前が誘惑するから、悪いんだぞ 囁きは、確かにあたしの耳に届く。

それでもその瞳は、どこか嬉しそうなもので あたしは、今度こそ、何が起こっているのか、理解できずに、限界寸前の意識を、手放しかけるのだった。

それから始まった、あたしと彼の内緒の関係は、この時のキスよりも、もっと口に出しては言えない状況になっていて。
卒業を控えたあたしは、もう内心どきどきだ。

そんなあたしの心なんて、露知らずというべきか、知っていて苛めているというか、彼がひどく、意地悪な奴だということを、あたしは思い知った。

授業中でも、休み時間でも、目が合ったら送られる　意味ありげな、視線。

周囲に気づかれないかとヒヤヒヤするあたしを横目に、あっさりとまた、『教師』の仮面を被る彼。

そして、今日もまた、眼鏡で隠された、彼の瞳に怯える一日が始まるのだ。

信じられないくらい、幸せな一日が。

(後書き)

この作品は、青蛙さまのブログで開催される「眼鏡フェスタ」の参加作品です。

眼鏡男子愛好家の皆さんのため、本当に思いつくがままに書いた、このお話ですが、感想等いただければ、すごく嬉しいです。

「眼鏡フェスタ」に興味がおありの方は、ぜひ青蛙さまのブログへ！
他の方の素敵イラスト、SSが掲載予定です！

<http://aogae.ru-1114.at.webry.info/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1351e/>

狼は眼鏡の中に。

2010年10月8日13時38分発行